
High School Story

Sakura愛姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H i g h S c h o o l S t o r y

【Nコード】

N 1 5 1 2 E

【作者名】

S a k u r a 愛姫

【あらすじ】

高校生活と（主に）恋愛物語を同化させた不定期更新式短編集です。お暇なら見てみてください。

くあらずじく

ちよつとかワイイぐらいの、平凡な主人公の桃花。

そんな桃花の彼氏は、1歳年下の無愛想なヤツ。

彼氏が自分のことをどう思っているのか・・・不安を募らせる桃花に対し、彼は決して桃花に言えない秘密を抱いていた。

私と君との会話は、常に小さな小さな画面上。

言葉ではなくて、文字での会話。

使う文字は、ア行からワ行、常用漢字、アルファベット。

—— だけど、私の想いは・・・何文も何語も何文字も使っても表せないくらい・・・複雑なんだよ。
ねえ、分かってる——・・・？

朝。電話の着信音で目を覚ますのが、私の日課だ。

今朝6時半。部屋中に、携帯電話の着信音が鳴り響く。

私はバツと起き上がり、モノトーン柄の携帯電話をカパツと開けた。

『Eメール1件』

私と“ある人”の待ち受け画面の端っこに、目立たないように反映される受信の文字。

受信BOXを開き、先頭にたつ『李央』という文字を選んで、ドキドキする心臓を押さえて決定ボタンを押した。

『はよ。』

たった2文字・・・いや、正確には3文字の本文に、肩を落とす私、
フジサキモモカ
藤咲桃花。

・・・まあ、仕方がない。彼はこんな人なのだ、と自覚していても、やっぱり落ちた肩はなかなか上がらなかった。

『李央、おはようッ！(* * *) * 』
* * * もう少しで寝坊するところだった

たよお（ワラ）今日もガンバロウね♪」

気持ちとは裏腹の文の内容を手際よく打ち、送信をクリックする。
可愛らしい音と共に、『Eメールを送信しました。』という文字が
画面に反映された。

そんな音とは裏腹の感情を持っている私は、ボサツとベッドに横た
わった。

瞳を閉じて瞼の裏に映るのは・・・一応彼氏の、椎名李央シイナリオの顔。

李央は、私より1コ年下の彼氏。年下なのに、私よりずっと身長が
高い。私が160センチ、李央が180センチ。

だから、手を伸ばしても頬を包むぐらいが精一杯で。

この距離が、途轍もなくもどかしい。

少しでも李央に近づくために、Netで有名な身長を伸ばす器具を
購入したが・・・成長期はもうとくに過ぎたせいかな。あと5セン
チさえ地から引き伸ばせなかった。

成長期が過ぎたことは熟知しているが・・・今でも、気がついたら
爪先立ちで行動している。（爪先立ちで身長が伸びるかどうかは不
確かだが）

+ - + - + - + - + -

「桃花、おっはよお♪」

テンションの高めの声が聞こえたと同時に、背中に感じるズシツと
した暖かい重み。

「・・・美沙。相変わらずテンション高いねえ。」

「やっぱJK（女子高生の略）はアゲアゲっしょ〜？」

そう言い、ニコツと微笑む絵に描いたような美少女の小倉美沙。オクラミサ

美沙は私が幼稚園の頃からの信じれる親友・・・いや、信友。自慢の信友だ。

だって美沙はニキビひとつない真っ白な肌だし・・・その肌に乗っかってる顔のパーツも全て整っている。

目も大きいし、鼻筋は通っていて高い。唇はまるで薔薇としか言い様がないほどの綺麗さ。髪も茶色のロッドで巻いたフワフワのミディアムヘア。しかも超綺麗。

手足は細長く、性格も明るくて誰からでも好かれる。おまけにHカップという高校3年生とは絶対思えない巨乳。（さっき桃花が感じた重みは多分“コレ”のせいだ。）

『もし小倉美沙がモテないとしたら、この世の1人さえモテないだろう。』と噂されるほどの完璧美少女。

・・・これ以上の分析は、いい加減「ストーカーかつ!？」と思われるので公表しないでおこう。

「はいはい・・・残念ながら私今、アゲアゲ状態じゃないんだよねえ・・・」

「およ？彼氏ですか??」

席に着いた私の頭の上に、美沙は独自の巨乳を乗つける。

・・・自慢ですか。あなた。

「・・・メールだけのやり取りってどう思う?」

「メールだけえ〜?」

乗つけたまま、美沙は私の頬をさすさす撫でる。

「美沙、いい加減重い・・・」

「ゴメンゴメン」多分李央君、桃花と話すの恥ずかしいんじゃないのかなあ？」

美沙は私から離れ、私の目の前に来る。

風を感じた頭の天辺は、少し身震いテッペンがした。

・・・それは、私自信の震えだったのかもしれない。

「恥ずかしい？・・・嫌なんじゃなくて？」

「それは・・・」

美沙はそう言うのと、「うん」と唸って口に手をやって考える仕草をつくる。

しばらくして、美沙は口に当ててた手をどけて口を意味深な笑顔を つくった後口を開いた。

「しゃべるのが苦手なんだよっ！」

「・・・一理ある。」

素直に、美沙の言葉に納得した。

李央は、私と会う時・・・絶対自分から話を振らない。私から振っても相槌程度の言葉しか発さない。

「ま、頑張つてね桃花」それよりさあっ！昨日、隆志とやったんだよね 超キモチよかったなあ」

・・・毎日恒例。美沙の『やりましたトーク』。

周りの目を気にしつつも、私は全然分らない話に相槌程度しか打てなかった。

・・・しゃべるのが苦手・・・か。
そりゃあ、李央はさっき言ったように、絶対話を振らない。俗に言う無愛想。（そこに惹かれたのが桃花だ。）

——でも・・・“彼女”である私ぐらい・・・他に見せない一面を出してもいいのにな・・・

李央にとって、私って・・・彼女って・・・何なんだろう。

私の不可解な気持ちとは裏腹に、窓からは初春の爽やかな風が吹き抜けていた。

・・・

4時限目。次は理科で移動教室だ。

「桃花あつ！理科室行こっつ！」

毎度毎度のハイテンション美沙^{ムスメ}が教科書をブンブン振り回している。それに同化して揺れるたわわな胸に、男子の目はイッている。

「わ、分かった分かった美沙・・・行こ行こ。」

・・・このままじゃあ、ヤバいと察した私は、教室を出るよう美沙を託した。

男子の批判の声を背に受けて。

前方から、高校2年生の群れがやって来る。
その中に・・・ガラ悪いヤンキー5人組が混じっていた。正直、私

はヤンキーが大嫌い。不正で、チャラで、女好きで、・・・（云々）
とにかく、大嫌いなヤンキーと顔を合わせないように下を向いて歩いてると・・・肩にドンツといった何かにぶつかった音がした。

「・・・つてえなあ。」

怒り気味の声から、誰かにぶつかったと察した私は

「あ、すみマセン。」

と不意に顔を上げた。

目に飛び込んできたのは・・・例のヤンキー。それは、大変な形相ギョウソウをして私を睨んでた。

・・・嫌いなヤツといっても、所詮私が先輩。「権力は私の方が上よ」と目で言いながら、自分よりも背の高いヤンキーを首を傾げて上目遣いで睨んだ。（ちなみに、いつもは先輩面はしない桃花。）

「・・・碧アヲのネクタイ・・・3年生か？」

数秒の沈黙の後、その形相は途端に緩み、私の方へ顔を近づけてきた。

モアツと香る、ヴ。トンの香水の臭い。鼻ピアス、唇ピアス、耳ピアス・・・空けた穴が余計くつきり見えて、気持ち悪い。

「・・・そうだけど？」

「侘びとしてさあ。俺らと一緒にサボらない??」

そいつらは、とんでもない提案を出した。

私は即座に顔を歪ませ、反論する。

「フザケないでよ。誰がアンタたちなんかと同じ空気吸いたいと思う?」

「いーじゃん♪メツチャ可愛いし♪ね?藤咲先輩♪」

ピアスが余計に多い野郎が、私の腕を物凄い力で掴む。痛みにまた顔を歪ませ、また反論した。

「ハアッ!?美少女ならもっとランク上の女子がココに・・・」

隣にいるはずの美沙の方を向くと・・・美沙は他の男にナンパされた。

ナンパ男のKY!、と叫びたいトコだが私のプライドが許さない。

「とにかくさあ、遊ぼうよあ」

益々掴む力を強めて、野郎は言う。

・・・「サボる」が「遊ぶ」に変わってるし!

「ちょ、いい加減離してっ・・・」

「逆らうとどーなるか分かってんだろっうなあ?」

・・・そう言ったその男の表情。

——怖い。

・・・としか言えない。

全身の力が途端に脱力した。

「さあさあ♪まずはゲーセンかなあ?」

ああ。先輩らしくないなあ・・・
そう思いながらも、やっぱり男の力には敵わなくて・・・グイグイ
引っ張られ、相手の思いのままにされた。

・・・でも、足はまだ何も支障ない。
いつそのこと、その野郎のヤバい箇所を蹴って気絶でもさせてやる
うか・・・

そんな策略を立て、戦闘態勢を構えた直後・・・フツと、掴まれた
力がなくなつた。

「・・・人の彼女に何してんだよ。」

代わりに聞こえたのは・・・低く、落ち着いた愛しい声。
すぐ横顔には・・・何考えてるか分からない無愛想な表情。でも、
どこことなく怒ってる・・・っていうことは想像ついた。

「ハア？彼女だあ？お前の？2-Eの椎名李央の彼女だあ？この美
少女さんは。」

「フツ。何逆上^{ノボ}せたこと言っただよ。——女遊びが俺らより1
枚上手の椎名李央君。」

——思考回路が、止まった。静止した。
そんな中、木霊するのは・・・『女遊び』っていう言葉だけ。

「・・・そうなの？」

私は、生気が抜けた声でそう言った。
隣の無愛想な表情は・・・困惑の表情ひとつ見せずにジッと5人を見
つめている。

・・・その目が。「よく分かってんじゃん。」って言うてそうで・・・セツナイ。何か心の中に込み上げてきた。

「・・・バカにすんなよ。テメエら。俺がお前ら裏切ったからって・・・それに。」

切ない気持ちの真っ只中にいる私の肩が、李央の広い胸板に引き寄せられた。

「コイツ、本気^{マジ}の女だから。捨てねえよ。」

直に感じる体温に酔い始めながらも、李央の表情を見上げると・・・口角を少し上げただけの、カッコよくて頼もしい笑顔がそこにあった。

5人は青ざめ、ピアスだらけのリーダーと思われる野郎が「行くぞ」と4にんを托し、どこかへ消え去った。

「・・・李、李央・・・」

さすがに公衆の目が痛くなった私は、我ながら掠れて弱々しい声・・・いや、もとい目立たないような小声で李央を呼んだ。

李央は私を胸板から放すと、手を握って「こい。」と手を引いて歩き出した。

私は戸惑いながらも・・・授業なんかよりも、その広い背中を追ってゆくことを決めた。

着いた場所は、屋上。教室の窓からの吹き抜けから感じた爽やかな風が、辺りを包んでいる。

風に靡く髪を掻き揚げて、李央はその場に座った。

李央にとって何気ないその仕草に鼓動が高まった私は、上昇する体

温を感じながらも李央の隣に座った。

しばらく流れる沈黙を経て・・・

「・・・ゴメン。」

李央が第一声を発した。

李央から喋り始めることに珍しさを覚えた私は、目を丸くして李央を見た。

「・・・んだよ。」

「いや、李央から喋り始めるって珍しいなあ」と・・・

へへつと笑ってみせたが、李央は反論ナシ。

私KYか？と自分自身に軽いツツコみを入れている間も・・・流れるのは、沈黙のみ。

「・・・メールのこと？」

「違えよ。」

私の予想は、呆気なく崩れた。

「俺が・・・元ヤンだったこと。気づいただろ。あん時。」

そう言われ、ああ、と気づく。

『俺がお前ら裏切ったからって・・・』

あの一声が、李央の過去を物語っていた。

「・・・俺が桃花に惚れた時、壮絶なヤンキーだった。・・・女を盥回しに食るように付き合って、性欲ぶつけて、拳句の果てに捨てて、また付き合って・・・の繰り返し。やなやつだろ？」

李央は、自嘲気味にそう話す。

その言葉の裏に・・・とても哀しい気持ちで隠されていた・・・というのは、単なる私のハズれた予想なのかな。

「ある時、明良がな・・・『3-Aの藤咲桃花っつーヤツ、ヤンキー嫌いだって。ムカつくよな。』って愚痴ってた。ソイツの名前が桃花だったから俺は焦ったよ。・・・嫌われてるんじゃないのかって。」

・・・いつも無愛想で何考えてるか分からない李央にそんな一面があるってことに、素直に驚いた。

「ヤンキー辞退したら、『女遊びが俺らより1枚上手の椎名李央』っつーことを周りにバラして・・・拳句の果てに今さっき、桃花にも知らされた・・・幻滅しただろ？こんな俺に。」

自嘲気味な話にケリをつけ、李央は寝転がって空を仰いだ。

私も同じように空を仰ぐと・・・凄く綺麗な空が、視界一面を覆う。そんな青空に見惚れながらも・・・『嫌ってない。』っていうことを表す言葉を選んだ。

「・・・幻滅・・・してないよ。」

数分の沈黙の後、私は口を開いてそう言った。

李央は不思議そうな顔をして私を覗き込む。

「・・・そりゃあ、李央が元ヤンだったってコトには驚いたけど・・・すっごい李央、魅力あったもん。・・・だから私から告白したんだよ？そう簡単に幻滅するはずないじゃない。」

私はそう言って、微笑んだ。

「過去がどうであれ——私は李央が好きなんだよ。」

・・・これが、私の精一杯の気持ち。
伝える術を知らない私が、頭を振り絞って出した・・・精一杯の「大好き」の言葉。「嫌ってない」の言葉。

——絶対揺るがない。

「・・・こんな野郎でいいのか？」

「勿論。」

「・・・元ヤンだし・・・」

「過去はどうでもいいんだよ。」

「・・・ヤバいくらいヤツてるし・・・」

「ヤツちゃった話なら、美沙から厭きるほど聞してる。」

一問一答の繰り返しに、私と李央は同時に笑いを吹き出した。

「・・・やっぱ桃花、おもしろいヤツ・・・俺が惚れただけある。」

「李央も・・・私が惚れただけの男だね。こんな一途な人・・・初めて見た。」

「・・・一途っつーな・・・」

少しだけ見上げて、見た李央の表情は・・・見事に真っ赤だった。
そんな彼を可愛く思えて・・・

私は、寝転んだまま、赤く火照った李央の頬を両手で包み・・・体をずらして、李央の唇に自分の唇を重ねた。

唇を離れた李央は、頬を火照らせたままそっぽを向いて・・・

「・・・絶対一生離さねえからな。」

呟やくようにそう言つと・・・下にずれた私の顎を持ち上げて、唇を重ねた。

・・・吐き捨てるように言ったこの言葉・・・心から、“李央らしい”って思えたんだ。

李央らしい、愛の言葉。

この時。私与李央の間には・・・20センチもの身長差はなく・・・1ミリたりとも離れず、密着してたんだ。

——その1ミリとも空かない幅に、幸せを感じた。

ねえ、李央。

私と君との会話は、常に小さな小さな画面上。言葉ではなくて、文字での会話。

使う文字は、ア行からワ行、常用漢字、アルファベット。

——だけど、私の想いは・・・何文も何語も何文字も使っても表せないくらい・・・複雑なんだよ。

ねえ、分かつてる——・・・？

「分かつてるよ。」

——これからは、画面伝いはナシにしような？

20センチもの離間が、砕け散った。
残ったのは、1ミリとも空かない幅。

もう二度と・・・こんなに距離を空けないでね？

【20センチの距離】

『20センチの距離』裏コント～お気楽！？～

作者「え～。製作にあたつての進行状況を・・・」

美沙「私、小倉美沙とダメ作者 Sakura 愛姫と共に申しまつすっ！」

作者「・・・ダメってなんだよダメって。てゆうかなんで 안타いるわけ？」

美沙「いーじゃんっ！出番少なかったしいっ！でもやっぱ李央君ウブだよねえっ！普通、あーゆうー人気のないトコだったら桃花を襲っ・・・」

作者「はいはいはいっ！一応 R15 じゃないからそんなコト言わな～いっ！ナシナシナシッ！」

美沙「ちえ～。つまんなあい。」

作者「じゃ、本題に移りまして・・・なんであのヤンキーら5人組は嫌いな桃花をナンパしたと思う？」

美沙「あ～・・・やっぱカワイかったら別腹なんだってよお。嫌いだったけど可愛かったからナンパした～って言ってた。」

作者「・・・意外とヤンキーってお気楽だね。」

・・・最後まで美沙はアブナイ奴ですね（＾A＾；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1512e/>

High School Story

2010年10月21日20時39分発行